

キョンは中国南東部および台湾を原産とする小型のシカ科の動物であり、日本では特定外来生物に指定されている。成獣でも体の大きさは中型犬程度で、オスにのみ角と牙がある(写真1、2)。日本では観光施設から逃げ出した個体を起源に、千葉県と東京都伊豆大島に分布している。千葉県で繁殖可能な成獣メスが確認されているのは県南部のみとなっているが、分布拡大と個体数増加が続いており、茨城県へのオスの分散も複数件確認されている。少しの藪があれば隠れられる体の小ささに加え、人慣れしやすく人家周辺にも出没することから、関東圏への分布拡大が危惧される。

農作物被害は、水稻、いも類、マメ類、だいこんやブロッコリー、アシタバなど多岐に渡り報告されている(写真3)。また、パンジーやツバキの花など、園芸植物の食害も多い。キョンの高密度地域では、庭に入り込まないように玄関の門にまでネットをかけている。濁った大きな声で繰り返し鳴くことがあり「男性が首を絞められて苦しんでいる声」と表現される。鳴き声の役割はよく分かっていないが、不気味な声だと嫌う人も多い。

草食性で葉の部分も食べることから、植え付け時からの防除が必要となる。80cmを垂直にジャンプする能力があるため、侵入防止柵の高さは85cm以上にする。一方で、まず柵の下から潜り込もうとするため、柵を設置する際にはペグなどで地際をしっかりとめるか、単管パイプを這わせて結束バンドで固定するなどして潜り込ませないようにする。角のないメスでは8cmメッシュのネットを通過することもあるため、それよりも小さいメッシュのものを用いる。一方で、オスは角や牙がネットに絡まりやすい。キョンの絡まりによる柵の破壊を避けるため、ネットで囲う場合にはメッシュの細かいものを使用する。電気柵は20cm間隔の2段張りでもある程度の侵入防止効果が見込めるが、10cm間隔の4段張りの方が効果的である。



写真1 オス



写真2 メス



キョン 鳴き声



写真3 食害(ブロッコリー)

## シベリアイタチによる被害とその特徴

近年、農業被害を及ぼす野生動物と共に社会問題になっているのが、住宅などの屋根裏に侵入する「住環境害獣」である。厄介なのは被害が私有地建築物内であり、糞尿による悪臭（写真4、5）、足音による安眠妨害、ノミ・ダニによる咬傷など精神衛生的被害が主で被害の数値化が難しく、自治体の介入がほぼできない。

西日本での代表格は外来種のシベリアイタチ（旧称：チョウセンイタチ）で（写真1）、元々はユーラシア大陸に広く分布する。日本に渡来した個体群は朝鮮半島が原産であり、渡来は昭和初期から徐々に四国・九州にまで進出した。だが、なぜか東日本には今なお入ってきていない。住環境害獣に対する防除は、捕獲や薬剤などを使用するのでは不十分である。動物が建物内に侵入できる全ての穴や隙間を封鎖する方法しかない。人間の住居内に侵入（写真3、6）するので、完全防除という高いハードルが求められる。特にカラダの小さいシベリアイタチは3cm程の穴や隙間からでも侵入するため、建物内該当箇所全てを封鎖する必要がある。具体的な侵入ポイントは、『屋根の重なり』『入母屋屋根の両隅』『床下換気口』『給湯器などの配管引き込み部』などである。だが、一般人が点検・封鎖するには、ある程度の建築知識が必要で、見落としや事故のリスクがある。よって被害が出ている場合は、専門の防除業者に依頼するのが無難であろう。

では一般人が出来ることは無いのかといえばそうでもない。主に住宅の増改築時や給湯器など、住宅設備設置時に侵入口が新たにできる場合が多いため、施工業者に隙間ができないよう要望するだけで、業者の注意意識が高まり、新たな侵入口発生の防止効果は大きいだろう。

ともあれ、これらを広域に施行すれば、シベリアイタチの家屋侵入被害は大幅に減らせるはずである。ただ、そのあとのシベリアイタチの行く末が気になる。我々は"保全"にも関心を向けなければならない。海外の研究者からは、本種を「NT（准絶滅危惧種）に指定すべき」という声も上がっているからである。

### ■シベリアイタチ

元は対馬に生息するイタチ科の動物。九州（北九州）には船便に紛れ、本州（阪神地区）には毛皮目的として持ち込まれ、その後野生化した地域移入種。以前はチョウセンイタチと呼ばれていた。生息域は西日本が主であるが東海地域でも確認され東日本への拡大が懸念される。農作物被害は果樹や果菜類に発生する。被害の痕跡は作物の下部に見られるため発見が遅れる場合がある。住宅街など人の生活圏を好む傾向があり水辺などの自然環境を好むニホンイタチと異なる。休息場として建物を利用するため糞尿や騒音などの被害も問題となっている。ニホンイタチよりやや大きく尾が長いのが識別点（写真2）。



写真1 シベリアイタチ

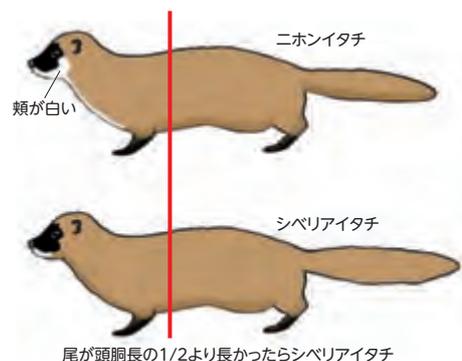


写真2 識別点



写真3 侵入口と糞被害



写真4 天井裏糞被害



写真5 天井裏溜めファン被害



写真6 配管貫通穴侵入

## キツネによる農畜産物被害とその特徴

キツネは農林水産省の被害統計では種ごとの集計値が示されていないが、北海道を中心に農畜産物への被害が多い動物種である(写真1、図2)。令和3年度の北海道の被害統計では、獣類の中で、ニホンジカ、ヒグマについて3番目に被害額が多く、年間1億6千9百万円にのぼる。

主な被害は、牛、スイートコーン、ビート、葉茎菜類などである。体重が4~5kgほどしかないキツネが、成体で500kgを超える牛を食害するのは奇異に映るかもしれない。牛での被害の多くは、子牛で起きており、分娩時に膣口から出てきた子牛の鼻先をかじり、結果として殺してしまう。さらに成獣では、雌牛の乳頭をかじり取る被害が発生している。牛舎の多くは開放的で動物が侵入し易いため、こうした被害が発生してしまうと考えられる。電気柵などを設置し、キツネの侵入防止対策を施すことが望ましい。

スイートコーンでは、収穫間近の黄熟機に、先端部分のみをかじりとられる被害が発生する。個々の子実での採餌量は少なくても、一部かじられることで子実全体を破棄せざるを得なくなり、被害量は多くなる。また、キツネによるスイートコーン被害は、子実の黄熟機に限定されるため、8~9月に集中する(図1)。

葉茎菜類の被害は、育成中の苗をキツネが踏み荒らしたり、掘り返したりすることで発生する。ただしビートなどの根菜類については、実をかじる被害も発生する。きゅうりの実などでも、キツネがかじる被害が発生しており、キツネが生息する場所では、さまざまな野菜類の実の食害についても、警戒する必要があるだろう。

地飼いのニワトリや合鴨農法で使用されるカモ類もキツネの食害に遭う(写真2)。特に子育て期の5~7月に多く発生する(図1)。これら家禽類についても、電気柵の設置による侵入防止対策が望ましい。物理柵だけではキツネの高い掘削能力により、隙間に穴をあけて侵入されるおそれがあり、注意が必要である。

### 引用文献

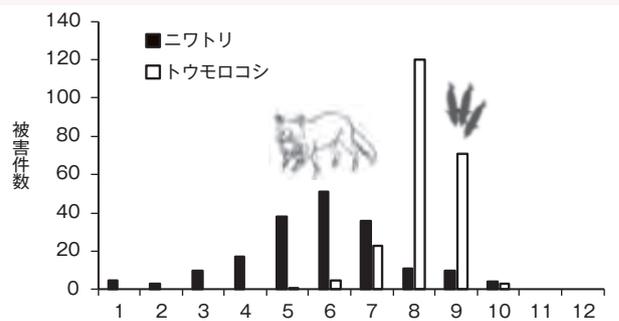
・北海道生活環境部自然保護課(1987)野生動物分布等実態調査報告書ーキタキツネアンケート調査報告書.北海道,札幌



写真1 キツネの外観



写真2 巣穴前でニワトリを食べるキツネ親子



発生年月 北海道生活環境部自然保護課(1987)より作成

図1 キツネによるとうもろこしとニワトリ被害の発生時期

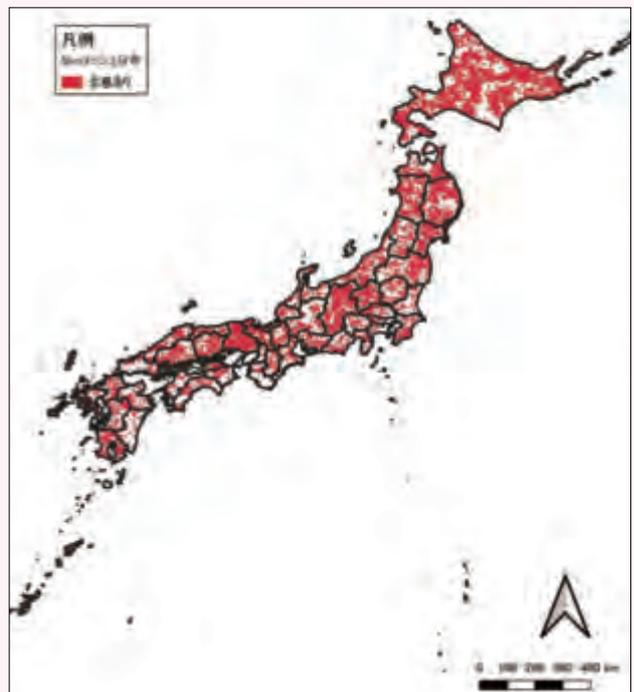


図2 キツネの分布図(環境省)